

# 委嘱審査員講評

## 第43回展委嘱審査員 外館和子（多摩美術大学教授）

コロナ禍にあって作り手は制作のモチベーションを持ち得るのか。今回、日本新工芸展の審査会場を訪れて、当初の懸念や不安は一掃された。

まず、多くの作り手が、それぞれに自らを進化させている。とりわけ会員や理事といったキャリアのある作家たちの『進化のかたち』が如実に見られたことは喜ばしい事であった。工芸は継続により技術は高まっていくが、一方で経験からリスクを恐れ、挑戦を回避しがちにもなり得る。しかし今回、受賞作は勿論、受賞作以外にも、多くのベテラン作家の作品に、確かな進化（深化）や、表現の新展開をみることができた。

さらに、学生選抜展に集まった高校生や大学生の作品の質と表現力にも、大いに見るべきものがあった。特に受賞作は、学生であることを差し引いても、国立新美術館の会場に並ぶにふさわしい内容とレベルを示している。しかも、それらが陶、漆、染色、金工、竹、木工、ガラスなど、実に幅広い素材領域にわたっていることも頼もしい。

最後に、今後のために制作の上で心がけて欲しい事を改めて挙げておこう。工芸作品である以上、技術を磨き、丁寧に仕上げることは大前提であるが、その上で、改めて『工芸の立体性』を意識して欲しい。重力に逆らって立ち上がる美しさ、ふさわしいボリューム感、作品が生き生きと見える動勢などである。染織など平面作品も、その内容に『豊かな空間』を感じさせるものであって欲しい。そうした要素が融合し、結果として観る者の心を揺さぶり、感動を呼ぶのではないだろうか。

### 第43回展委嘱審査員 坂元暁美（上野の森美術館学芸課長）

日本新工芸展の審査に初めて参加させていただきました。工芸作品の審査自体が初めての経験でしたが、接してみても素朴な感想は、優れた工芸は彫刻や絵画と同じく、見る側に専門知識はなくとも、直感的に響く美しさ、力強さを備えているということです。

ただし、絵画や彫刻などの純粹美術と異なるのは、やはりその作品を生活空間に置いた場合を無意識に想像して見ることだと思います。その点、花入れや器、筐といった本来使われるモノとしてのシンプルな造形と、個々の作家が追求する独創的な造形が自然に、かつ刺激的に融合しているものにつよく惹かれました。

とくにお名前を挙げると、どれも立体ですが、待田和宏氏、田中照一氏、西川勝氏、阪口浩史氏の作品です。

また、全体として、多様な素材と、全国各地域の特色ある工芸の伝統がしっかり現在の工芸にも受け継がれていること、日本の工芸の層の豊かさをあらためて確認する機会にもなりました。